2017年12月24日(日) ルカ1:26-38

この箇所に書かれているわけではないが、マリアは、自分から生まれたイエスが30歳過ぎに十字架刑で殺される経験をする。それでもマリアがイエスを生んだことがすばらしかったとされる話であることを覚えておきたい。それは私たちの日常でも、神の思いに従って思い切って行動したことが、一見とんでもない失敗に見られてしまうようなことがあることも覚悟しておきたい。

2017年12月26日(月)　使徒6:8-15, 7:51-60

ステファノがあまりにもすばらしいがゆえに、妬みやデマにより殺されてしまうことになる。イエスの歩まれた一生とも重なってくる面がある。イエスが生まれたという降誕節（12月25日から1月5日までの12日間)にあって、このような箇所を読むことに、大きな意味を感じる。

2017年12月29日(金)　イザヤ49:5-15

15節の言葉、マリアのことを思い、そしてすべての子の母親、そしてすべての人類の造り主を覚える。　その造り主が、わたしたちを決して忘れないということに大きな希望がわいてくる。この世のすべての民を愛しておられる造り主をあがめているのは、ユダヤ教でもキリスト教でもイスラム教でも同じなのだが、争いが絶えない現実をみて悲しくなる。

2017年12月31日(日) ルカ 2:22-40

救い主イエスの誕生を待っていた信仰者たちとして、シメオンとアンナがとりあげられている。彼らはイエスの誕生を見とどけて天に召されたのだろう。　なぜか私が按手を受けたときの兄弟と姉妹を思い出している。二人とも私が按手受けた際、元気に按手礼には出てくださったが、マーク兄弟2週間後にS姉妹は3ヶ月以内に天に旅立たれた。